

若い頃にはよく注意されたものである。「ちゃんと現実を見なさい、現実を」と。その現実なるものがよくわからなかったから、現実とはどういうものか、いつも頭の隅で考えていた。大人になれば、あれこれ現実というものに触れるはずだ。そうなれば、少しは「現実がわかる」ようになるだろう、と。

ところがいつまでたっても、その「現実」なるものがわからない。とうとう自分で勝手に定義することになった。現実とは「その人の行動に影響を与えるもの」である。それ以外にない。そう思ったら、長年の重荷が下りてしまった。

だから現実是人によつて違う。唯一客観的現実なんてものは、皮肉なことに、典型的な抽象である。だって、だれもそれを知らないからである。私が演壇の上で講演をしているとする。聴衆の目に映る私の姿は、すべて異なっている。なぜなら私を見る角度は、全員が異なっているからである。それならテレビカメラは、どの角度から私を捉えたら、「客観的」映像となるのか。二人の人が同一の視点から、同じものを見るなんてことは、それこそ「客観的に不可能」なのである。

(中略)

一人一人の世界が感覚的に異なるからこそ、個人や個性の意味が生じる。

それできやあ、個人なんかいらぬ。それを「些細な違い」と暗黙に決め付けるから、若者が人生の意味を見つけられないのである。これといつてさしたる才能もない自分が生きる意味なんて、どこにあるというのか。世界中を見渡せば、自分の人生なんて六十億分の一に過ぎない。過去に生きた人まで含めたら、いったいどこまで些細になるだろうか。

そう思うから、今度は個性、個性と逆にいう。それを強調するほうの錯覚とは、個性が「自分のなかにある」という思い込みである。そもそも違いとは他人が感覚で捉えるもので、自分のなかにあ

るものではない。「お前は変なヤツだなあ」といわれて、「エッ、どこが」と怪訝な顔をしているのが個性であり、「私の個性はこれです」などと主張するものではない。近頃は入学や入社ときに、そんなことを書かせることもあるらしいが、話がそれではひっくり返っている。そんな会社や学校はどうせロクなところではなからう。相手の個性を発見する目が貴重なのであって、個性自体が貴重なのではない。状況によつて、社会が必要とする個性は違ってくるからである。

そもそも「自分で意識している個性」なんてものがあつたら、ぎこちない人生になるであらう。俺の個性はこうだから、こうしなくっちゃ。そんなことを思いかねない。冗談じゃない、素直にしてい

て、そこにおのずから人と違うところがある、それを個性というのである。

素直に自分の気持ちに従わず、「こうしなくては」と思うのが世間では普通で、それは社会的役割というものがあるからである。天皇陛下はこうしなくてはならないということがたくさんあるはずで、それは社会的役割である。それを勝手に変えられたら周囲が困る。だから「こうしなくては」と本人も思うので、それはホンネとは違って当然である。

いまの大人は、社会的役割を個性つまり自分と混同していないか。社長は個性でも本人でもなく、社会的役割である。定年になればそれがわかるであらうが、現代の問題は、たとえ年配者でも「定年になるまで、それがわからない」ところにあると私は思っている。私は会社のソトの人間だから、社長も平も区別がつかない。そんなものは、私にとつては抽象に過ぎない。それを「現実」だと思つてゐるのは、そう思つてゐるだけのことである。

(養老孟司『ぼちぼち結論』より)



1 近代合理主義の精神は、思考の過程、あるいはものを考える過程で、さまざまな夾雑物、余計な要素を取り除き、いくつかの単純な原理にしたがって論理を進めようとする思考法をとる。**2** その過程で仕掛けられる判断の基準も、できうるかぎり単純であることが望まれる。そして、その考えられる単純な原理こそが、ふたつのものからそのいずれかを選択するという判断基準であった。

3 すなわち、真と偽、善と悪、美と醜、正と否など二者択一の論理こそ、近代合理主義が旨とする判断の方法にほかならない。真なる前提から始まって、真なる判断を繰り返していけば、真理に到達すると固く信じられたのである。**4** デカルトが、数学的方法に思考方法のあるべき姿を認めたのも、伝統的な数学がこの真偽二者択一の方法に絶対的に依っていたからだ。
(中略)

5 しかし、真偽の弁別を繰り返していつて世界全体の判断に達するという演繹的な論理は、世界全体を判断の傘下に収めようとするのだから、当然のことに、判断の普遍妥当性を要求することになる。**6** つまり、ある部分では当てはまるが、べつの部分になると当てはまらない理論は、斉一的な世界像を求める近代の科学的合理主義のなかでは市民権を得ることはできないのである。**7** たとえば、科学実践の現場でも、理論にそぐわない実験結果や現象が現れたときに、それらを無視し捨象して理論の斉一性を守ることが日常茶飯におこなわれるのである。**8** しかし、そうした例外に属する現象が無視しえなくなれば、それを取り込むことのできない理論そのものを変える必要がでてくるわけで、こうして理論の転換がおこなわれるようになる。**9** これが、「科学革命」あるいは「パラダイム・シフト」と呼ばれる現象のひとつである。

こうした現象は、しかし、世界に対する理論の普遍妥当性という信念ないし確信にも似た意識に由来するものだということがわかる。**0** あらゆる理論は、数学の原理がそうであるように、

いついかなる場所でも当てはまらなくてはならないと固く信じられてきたのである。そうしたなかで、理論に妥当しない例外的な現象は、偶然的なもの、あるいは蓋然的なものとして貶められてきたのである。そして、不確定性原理の出現に見られるように、現象をもれなく網羅し説明する理論の普遍妥当性そのものが揺らぎ出してくると、方法としても、もはや確率統計的な方法をとらざるをえなくなってきたのである。つまり、現象の世界に対し人間の側がなせるのは、一定の法則を世界に押しつけることではなく、現象のあるがままの姿を記述することと考えられるようになったわけだ。

理論や法則の普遍妥当性という近代科学の絶対主義的傾向は、相対性理論や量子力学など二十世紀の初頭に相次いで現れる新たな潮流によつて、おおいに揺さぶりをかけられた。これらは、学問や理論の世界のなかだけで起こったことのように思われているが、そうではない。われわれの日常生活にも、少なからず影響を与えているのだ。影響を与えているというよりは、むしろ、同じ大きな流れが、理論的世界にも、また日常生活にも現れているというべきなのだろう。とにかく、「すべての……は……である」といった論理学の全称判断のようなものに見られる、普遍性への意識をもった思考法は、個の意識が昂揚し、多様性が横溢するようになった社会的意識や日常生活のレベルにおいては、もはや妥当性を失いつつあると考えるべきだろう。

(山本雅男『ヨーロッパ「近代」の終焉』より)



時が経過する、時間が早い、などと語るとき、つねに「時間」が主語の位置に立つ。しかしそうして時間を主題化することは、時間のあり方そのものを変えてしまうのではないか。言語による主題化的反省が哲学の方法であるとする、時間の問題は永遠にその手から逃れざる仕組みになっているのではないか。というのも、時間は言挙げされない仕方では経験されない、という面倒な性格をもつように思われるからである。「時間とは何かを誰も私に尋ねないとき、私は知っている」というアウグスチヌス『告白』の有名な逆説も、そのことを物語っているのではないだろうか。

時間を時間そのものとどめおくためには、直接に時間を問うという仕方ではなく、時間がそれに即して現象するところの何か、それ自体は時間ではないが、時間と不可分な何ものか、を取り上げるという迂回戦術しかないように思われる。その種のキーワードとしてすぐに思い浮かぶのは、「記憶」であり「風景」である。たとえば記憶は、アウグスチヌスが論じたように、時についての記憶であり、記憶自体が時のうちにある。

では、風景はどうか。それは、時間よりも空間を表しているのではないか。たしかにそうだが、反面、風景の風景たるゆえんは、それが時の経過と一体であるという点にある。そもそも時の経過は、何をもって測られるのか。風景との関係によってである。

額に収まった絵や写真が典型だが、風景は空間的・視覚的構造をもつ。それは時間の動きを止め、瞬間において写し取られた世界の見え姿である。時間と空間を対立させる近代的なものの見方に立てば、風景は空間的に表現されるものである。しかし、知性による分析的な見方を離れて漠然と眺めた場合には——じつさい、そういうふうに見てこそ風景なのだが、案外それが難しいのかもしれない——、風景はもはや瞬間的な像ではなくなり、額縁の外にはみ出しながら、生き生きとした動きを取り戻すだろう。その動きは、物語と一つになった時間的な動きではないだろうか。

私が哲学的風景論の構想を得たきっかけの一つは、風景というものが実は物語なのではないか、という着想であった。人は日常的な所作の中で、いろんな物事にかかわりあって生きているが、それを誰も風景であるとは言わない。しかしそれは、すでに身体レベルで生きている風景だと考えるべきではないか。それは、一人一人のもとは動きの只中であつて、まだ形をもった映像にはなっていない。しかしそうした個人の体験が、人々によつて語られ、集団の共有する物語へと移行した時点で、風景と呼ばれるにふさわしい形を具えるようになる。そういう「物語としての風景」に、私は「原風景」という言葉を当てはめることにした。原風景を中心にして考えてえれば、風景が物語である以上、それは空間と時間が一体化した構造である。かりに物語は時間的、風景は空間的だとしても、両者のアマルガムである原風景は、同時に時間的にして空間的なのである。

(木岡伸夫の文章による)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



言葉の裏返しを考える上でいつも思い出すのは五味太郎の『あそぼ
うよ』というごく幼い子向きの絵本である。

登場するのはことりとおじさん風のきりんだけ。ことりが「あそぼ
うよ」というと、きりんが「あそぼない」と答える。毎ページ、この
くりかえし。しかし、絵をみるとこのきりんおじさんはなかなかふざ
けんぼで、首をくるくるまわしたり、かくれんぼしたり、あぐくのほ
てはことりを背中に乗せて泳いだり、サービスマップの遊び相手なの
だ。しかし口にする言葉は徹頭徹尾「あそぼない」。最後にことりが
「あした また あそぼうよ」とうれしそうに飛び去るときも、きり
んおじさんとはとつぱい顔で「あした また あそぼない」とこたえ
る。

この絵本、まじめな保育園幼稚園の先生方には評判はよろしくな
かったらしい。どこかの園長先生から「せめて最後だけはあそんでほ
しかった」という抗議こうぎの声が寄せられたという話を聞いて笑ってし
まった。が、このやり取りの面白さを大人が理解して楽しく読めば、
子どもたちはてきめんに喜ぶ。子どもたちはくり返しをすぐ覚え、き
りんおじさんになって、わたしが「あそぼうよ」と呼びかけると、み
んなで声をそろえて「あそぼない」と叫び、くすくす笑うのであ
る。意味の上で反対のことを言っても相手と同じ合うというコミュニ
ケーション体験は、この相手ならばこそ、という濃厚な関係を互いに
意識させる。だから、くすぐったい。子どもたちはきりんおじさんに
なつて、言葉の文字通りの意味を超えて相手に触れるのである。そ
う、ここでは言葉は相手に触れる道具になっている。そのためには文
字通りの意味が過激であるほうが触れるという感覚を強くする。言わ
れた方は、はつと胸を突かれ、瞬間、立ち止つて、相手の意図を
知つて笑う。こんな触れ合いが成り立つためにはなんといつても
お互いのゆるぎない信頼関係が前提になるではないか。
「ウソ」「マジ」もこれと同じだと思う。不信の念を過激に表せば表
すほど、言葉の意味を超えた次元での互いの信頼関係は強固に確認さ
れる。言葉によるスキンシップといつてもいいかもしれない。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

電車のなかなどで数人の若い人の会話を聞いていると、「ウソッ」
「マジッ」がやたらと耳を打つ。どうやら会話の内容には重みはなさ
そう、場をもたせるのが大切ならしい。ごによごによと話があると、
間髪をいれず「ウソッ」、「マジイー」と来る。謡曲の鼓のように
それが「カーン」と響き、会話を支えている。「ウソ」「マジ」は心
の絆を確かめ合い、安心して次に進む会話の青信号のようだ。「ほ
んと」よりもずっと相手の心のど真ん中を突いて親しさを盛り上げて
いる。若い人たちの間で瞬く間に広がつていったのもうなずける。
しかし、あいつちの言葉などは使う頻度が高いから、使つていううち
に洗いざらしになつて、当然、色あせてくる。シヨウ迫力も失せて
くる。中高生たちの会話に耳を傾けていると、「ウソ」も「マジ」
も、もうそんな鮮度は失つて、ごく自然に、普通に使われている。昨
日も塾に来ているおとなしい地味なタイプの中学生の女の子がふた
り、仲良くなつて静かに会話をかわしていたが、「ウソ」や「マジ」
がささやき声で行き交つていた。たつた二十数年でこんなふうに言葉
の命の変化を見極められるなんて面白い。万が一「マジ」が生き残つ
たら、五十年後、ふたりの老人が日向ぼつこをしながら、互いに「マ
ジッすか」と静かに言い交わし、語り合う場面があるかもしれない。
おやおや、どこから高校生たちの声がする。「ありえな〜い！」

(長谷川摂子の文章による)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



「鉄ちゃん」と言うんですよ、とそのとき若きドイツ文学者が教えてくれたのである。何というきつぱりとした、即物的な呼称だろう。少しばかり間抜けでもある。正式には「鉄道ちゃん」なのか？ 線路は続くよどこまでも、の歌詞どおりに鉄路への、そして鉄路を駆けるものへの憧憬を膨らませ続けるフェチ男たちが堂々、われらは「鉄ちゃん」なりと胸を張って日々活動にいそしんでいるという事実を、僕はうかつにも初めて知った。そして自分にはおよそ興味のもてない事柄に無償の欲望を傾注してやまぬ人間が世間に遍在していると知ったときに感じずにはいられない、一種の神聖な戦慄をそのときも覚え、普段どおり理知的な口調を崩さずに語り続けるトーマス・マン研究者の白哲の顔を凝視したのだった。

彼こそは僕が自覚的に出会った「鉄ちゃん」第一号だった。そして第二号が赤ん坊の姿をとって自分の家にやってくるとはそのとき、想像すら及ばないことだった。

幼い男児と日々つきあっているうちに、わが日常空間にはすっかり鉄道網が張りめぐらされてしまったかのである。なにしろ相手は起きてから寝るまで、食事でも遊びでも「でんちゃ」「じようききかんなちゃ」がなければ始まらない。少しずつたまってきた彼の蔵書の背中を見れば『JR特急・超特急一〇〇点』『JR山手線一周一〇〇点』『しゅっぱつしんこう』『きかんしゃトーマスのしゅっぱい』『ゴードンはどうだらけ』等々である。熱唱するのは「線路は続くよ」「青い光の超特急」。朝起きてまず考えるのは「いのかしら線」に乗って「いのかしらこうえん」に行くこと。毎瞬、どちらを向いても列車尽くしの連続で、彼が鉄路の夢から解放されるのは「おっぱい」に吸いついているときだけではないかと思われる。

むろん、「無文字」段階にとどまっている一歳児のこと、いくら毎日絵本や図鑑で研鑽をつもうとも、説明文を読めるわけではない。目で見ながら、親の読み聞かせる声と合わせて図像を記憶に刻

むのみである。それなのにどうして彼は「すいごう」と「あやめ」と「しおさい」、あるいは「オホーック」と「すずらん」などという僕には区別のつけようもないと思える類似・同型列車を正しく名指すことができるのか。一種異様なまでの眼力、記憶力を、列車は幼児から引き出してみせる。「のぞみ！」と騒ぐので何ごとかと思う、とまったく関係のない写真に「のぞみ」が豆粒大に写り込んでいたなどということがしょっちゅうだ。しかもたとえば七〇〇系なら七〇〇系を、写真で見ても絵で見ても模型で見ても、幼児は迷うことなく七〇〇系と判断できる。これまた不思議なほどの読解力なのである。新幹線に「新幹線」という以上の分類を考えてみたことのなかった父親などには到底理解の及ばない事態だ。すべては列車たちがいかに強く男児に呼びかけ、アピールしているかということだろう。そのコール&レスポンスによって息子は日々鍛えられ、鉄道との関係を通じて世界を広げていく。

大げさに言えば——しかし実際これは、大げさに騒ぎ立てなくなるくらいにダイナミックな相互関係なのだが——、幼児は「鏡像段階」のみならず「電車段階」を経ること（両者の時期はほぼ一致するというのがわが仮説）、言葉と物の緊密な連関を体験していくのである。食事とき、すっかり気を散らせている幼児の注意を惹き、その口を何とか開かせて食べ物を押し込むには、「あつ、一番線にこまち到着！」といったせりふに如くものはない。そのとき彼が開けた口は特急を迎える駅となり、同時に彼自身が「こまち」と同一化している。彼が摂取するのは言葉と電車なのだ。あるいはもちろん、ちゃんと食べれば「立派な運転士さん」「駅長さん」になれるよ、という説得も有効だ。そうすると幼児はぱくりと食いつき、目をくわっと見開きぶよぶよした両腕のわずかな筋肉を硬くして力こぶしを作る。栄養摂取に応じることで、九十センチたらずの小さな体はたちまち栄光の身体と化する。

（野崎歓『赤ちゃん教育』による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ビジネス・マナー書で指摘されているような、「ご苦労さま」の誤用が頻繁に起こる原因は、現代の日本では、仕事の出し手と受け手の関係と、日常の人間関係における上下序列意識の間に、乖離が生まれてきたからだと理解できる。おそらく私たちには、「ご苦労さま」は、その語感から、命令をした人がそれを遂行した人をねぎらう言葉と考えるのが自然だという感覚が身についているのである。ところが、現代ビジネス社会における指揮命令の関係の中では、仕事を命じる側が日常生活一般の人間関係でいう目下の人物であることは珍しくない。指揮命令体系の中で上下関係が、日常の上下関係と頻繁に逆転するのである。それゆえ、「ご苦労さま」の使い方が混乱するのだ。

さて、以上を念頭に「お疲れさま」に話を戻そう。「お疲れさま」を、『広辞苑』にあるように相手の労をねぎらうための言葉と解釈すると、「ご苦労さま」との実質的な差はどこにあるのだろうか。

それは、「お疲れさま」が指揮命令の関係を前提としないという点に求められなければならない。つまり、相手の労苦は自分の指示によつて発生したのではないということではなければならない。ここには命令する、されるという意味での上下関係は存在してはならないのである。そうでなければ、「ご苦労さま」と変わりがない。

そう考えると、「お疲れさま」を挨拶として抵抗なく使うためには、相手の労苦は自分の命令によつて生じたものであつてはならないことになる。その労苦に関して自分には責任がないということではなければならないのだ。

つまり、「お疲れさま」とは、相手の経験した労苦に同情しながらも、労苦を生み出した原因は自分とは関係のない第三者にあるということも同時に主張する言葉であり、そこに「お疲れさま」が持つ戦略的效果の本質があるのだ。

その意味で、「お疲れさま」は相手を突き放した言葉ともいえる

だろう。私が「お疲れさま」に不満を感じてきたのは、言葉が持つ責任放棄の感觸を嫌うたためかもしれない。

しかし、そのような無責任さが挨拶として通用するというのも奇妙である。実際にこの言葉を抵抗なく挨拶に使う人々が、相手の労苦に対して自分が無責任であることを、ことさらに強調したがつていっても私には思えない。

そこで、さらに踏み込んで考えてみる。すると、「お疲れさま」が挨拶語として定着した背景には、疲れているのは相手だけではなく自分も疲れているという、共同体的な感覚を確認しあおうという戦略的意図があるのではなからうかということに思いついた。相手に苦勞が発生した責任は自分にはないということを主張するだけではなく、自分も相手も疲れている、ともに何者かに疲れさせられている同志として、お互いに慰めあうという意味合いがあるはずだ。だからこそ、職場の誰かが先に帰るとき、皆でそろつて「お疲れさま」と声をかけることが、違和感のない挨拶行為として成立するのである。

したがって、「お疲れさま」が挨拶語として最近定着した背景には、何者かに疲れさせられているという閉塞感が、現代日本に蔓延していることがあると想定すると、つじつまがあう。実際、『広辞苑』を基準に判断するならば、挨拶言葉としての「お疲れさま」が定着しはじめたのは、バブル経済崩壊直後、すなわち日本が簡単には解決できないさまざまな問題を抱えた長期停滞期に突入した時期からと推測するのが自然であろう。理屈を追求してみると、これは偶然とは思えない。

(梶井厚志「『お疲れさま』による」)



いずれにせよ彼は室内に閉じこもって三十七年を過ごした。髪は母が切つてやつていたらしい。母親へ、医者に診せようと考えたことはないのかと尋ねてみると、八十歳を越えたのにかくしやくとしている老母は、いささか焦点のずれたことを言うのだった。「いえいえ、とても人さまにお見せできるような息子ではございませんでしたので」。

そんな彼が鑑定を受けるに至った経緯は煙草であった。煙草の火の不始末から火事を起こし、母子は焼け出されてしまった。そのときに彼はパニックに陥り大声を上げて暴れ回ったらしい。そのために、警官が保護をして鑑定へつなげたのである。

それにしても驚くべきは、彼らの家が若者たちの集まる有名な繁華街の中にぽつんと紛れ込んだ木造の古い一軒家だったことである。わたしは、実はその家を目撃した覚えがある。よくも地上げ屋などに抵抗して家を維持しているものだと思つたし、何だか暗くて不気味な家だなあとも感じた。その印象は、まさに凶星だったのである。

彼が三十七年間に逼塞していた事実を、そしてそんな息子と一緒に暮らしていた母のことを考えると、これはひとつの不幸であると感じざるを得ない。が、本当に不幸と言いつけるのだろうか。

彼らには棲む家もあつたし、仕事をしなくとも暮らしていける程度の金銭的余裕もあつた。身体的な病氣にもかからずに済んできた。彼らは変化を望まなかつただけである。現状維持こそが幸福と捉えていた。いや幸福とは思つていなかったかもしれないが、だから何かをするといった意志はなかった。

精神科医の立場で老若男女たちと毎日接していると、実に多くの人々が「変化」を嫌うことを知る。なるほど口では現状を手放して肯定したりはしない。不平不満だらけである。夢を持つことと努力こそが大切だ、といった類のことも語る。だが、実際には何もした

がらない。何かをすれば、ベターとなることもあれば逆によけいひどい結果をもたらす可能性もある。何かをすること自体が、たとえ最終的には良い結末をもたらそうとも、多かれ少かれ面倒な出来事を出来させる。そうしたことにはいちいち対応しなければならぬ。予期せぬこと、厄介なこと、後悔することもある。

それなりのリスクや疎ましい副産物があるうとも、ともかく変革を求めようと考える人は少数派なのである。精神的にタフな人間であり、そういった人々の行動は決してスタンダードではない。大多数の人々は、あれこれと考えているうちに面倒になつてしまふ。不満はあつても、現状に対してとりあえず慣れ親しんでいると、変化の訪れはむしろ億劫となる。今がベストではないけれども、変化はもつと疎ましい。

ぬるま湯に浸かつているのも現状に甘んじているのも不幸に安住しているのも、変化を嫌うといった点では同じである。そしてユートピアでの暮らしも。

変化に喜びや充実感を覚える心性ももちろんあるが、それはあくまでも精神的なタフさを前提としているのであつて、もしかすると変化や変革に価値を置く発想は健康で丈夫な人間ゆえの鈍感さや残酷さに通じてさえいるのかもしれないのである。

(春日武彦『幸福論』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「カセット」というと、いまではひとは普通カセット・テープのことを考えるだろうが、もともとは宝石などを容れる小箱、つまり「宝石箱」のことである。だから、「カセット効果」というのは、外国語や外来語をカタカナで表記することで、ことばを、中の見えない宝石箱に容れて、明確な概念や意味よりも、いかにもありがたそうにムード化して示す効果を意味している。

しかも、それらの外国語のカタカナ表記は、多くの場合、門外漢にとっては原語を調べようにも調べられないかたちに縮約されているので、たちまち隠語と化してしまう。このような隠語たるやしばしば専門家たちの合言葉にもステータス・シンボル——これも外国語のカタカナ表記だが——にもなるのだから、手に負えないのである。原語の概念を明らかに示すためには、ときによつては、思い切つて翻訳した方がい、と思うのである。

その点で、日頃から私が感心しているのは、現代中国語では、コンピュータのことを「電脳」、プライマリ・ケアのことを「全科医療」、ファジー工学のことを「模糊工学」と思い切つて意識していることである。このうちコンピュータ→「電脳」は、脳機能の一部の外化を示している確なだけでなく、英語の「computer」やフランス語の「ordinateur」が依然として「計算機」に因われていることを思えば、実体の表現としてすぐれている。

プライマリ・ケア→「全科医療」となると、さらに傑作である。プライマリ・ケアのプライマリは、プライマリ・スクール（小学校）のゴール（主要目的）のプライマリ、目的のうち「第一番目に重要な」ということを表わしている。（この全科といえ、かつて小学校の全教科の参考書が『××全科』と呼ばれていたことを思い出す。）日本語ではこれまでに決まった訳語がない。「基本医療」とか「一次医療」とかという訳語はあるが、十分にその意味を表わし切っていない。

もちろん、日本語の特徴は、漢字仮名——この場合には、ひらがな——まじり文からなる上に、どんな外国語・外来語でもカタカナで近似的に音写することで、自国語の構文を壊さずにそのなかに取り込めることにある。これはたいへん便利なことであり、このような日本語の持つ柔軟性は、日本の経済発展や諸外国の文化を採り入れる上で、少なからず役立っている。しかし、その反面で、日本語のなかにカタカナの外来語や外国語がとかく感覚的、気分的に安易に導入され、意味がよくわからずに感じただけで使われることに対しては、野放しにしておくべきではなからう。

たしかに漢字によつて意識せずにカタカナで音写しておけば、原語の持つ多義性を保存できた「気分」になれる上、新鮮な感じがするし輝いて見えることもある。だから、学術用語としてばかりでなく、広告・宣伝用語としても、新社名としても、カタカナの外国語が好んで使われるのである。この「カタカナの外国語」は、もうすでに日本語になつていと言つてもいいので、排除することなどできないが、それだけに、漢字による意識に対するのと同じくらい「うるさい眼」を、「カタカナの外国語」の使用法には持つべきであろう。

（中村雄二郎「インフォームド・コンセント」による）



1 ハマーシヨルドの日記はきわめて特異である。国連事務総長という要職にあつた人の、またその職責にひたむきに献身していた人になるものでありながら、職務にかかわる記述が一行としてない。2 それを読んだだけで書き手の職業を言い当てるのは、おそらく不可能だろう。世俗的な属性だけでなく、時間も空間もすべて超越しているかに見える。時折現れる日付さえ、この印象を拭い去りはしない。3 それはそうだろう。この日記は彼と「神とのかかわり合いに関する白書のようなもの」(友人のレイフ・ベルフラゲ宛の遺書)なのだから。

4 神との対話は透徹した自己省察となる。もし神の視線が自分に照射されたなら明るみに出されるのは何か、それを測り尽くすとしても言いかのように、ハマーシヨルドは自分の弱さと卑小さを見つめ続けた。5 「それから目をそらしたなら、たちまち自分の行動の誠実さを脅かすことになるから」(一九五七年四月七日)である。傲慢さや自己憐憫、怯懦や取るに足らぬ自尊心を徹底的に排除した。6 彼にとつて誠実な生の営みとは、存在にまつわるそれらの夾雑物をぎりぎりまで削ぎ落とすことだった。日記中に引用されている次の文章が、そうした彼の思考をあますところなく伝えている。

7 大地に重みをかけぬこと。悲愴な口調でさらに高くと叫ぶのは無用である。ただ、これだけでよい。

——大地に重みをかけぬこと。(一九五一年・日付不明)

8 「大地に重みをかけぬこと」とは、言いかえれば自己放棄つまりおのれを空しくすることを意味する。この自己放棄(ないしは自己滅却)という言葉はしばしば日記の中で用いられており、ハマーシヨルドの思想的中心点の一つだと言つてよい。9 それは夾雑物に惑わされたり、自分自身にのみ拘泥したりせぬことである。こうして彼は、精神の高みに飛翔する瞬間のために準備を続けた。0

まさに魂の彫琢とでも呼ぶほかはない。何がこれほどまでに、彼を魂の彫琢に駆り立てたのだろうか。この人の「憧れ」は何であつたのか。ここで私たちは、「よき死のための成熟」という一つの答えに出会う。

「死はおまえから生に捧げる決定的な贈物たるべきであり、生に対する裏切りであつてはならない」(一九五一年・日付不明)、そう彼は自分に語りかけている。そこに見られるのは、漠然とした死への恐怖などではなく、躍動する生の営みの果てに積極的に死を迎え入れようという、確固たる姿勢である。みずから命を絶つ諦めでもなければ、他人の生を踏みしだく傲慢さでもない。

死を「生に対する贈物」にすべく彼が求めてやまなかつたのは、「成熟」ということだった。一九五三年四月七日、国連事務総長に就任した日の日記には、くり返しそれへの渴望が書かれている。たとえば、「成熟——なかならず、子供が仲間と遊んでいるときのように、現在の瞬間に明るく澄んだ無心さで遊び、仲間と心がひとつになりきつて影ひとつささぬ境地」。遊びほうける幼子との結びつけが意表を衝くが、この「無心さ」が、実は自己滅却と同じものであると考えるならさほど不思議はない。こうして彼は、国連事務総長という、「世界で最も不可能な仕事」(初代事務総長T・リー)を、気負いも昂ぶりもせずに、成熟と自己滅却という自分自身の原則を静かに再確認することだけで始めたのだつた。

(最上敏樹『国境なき平和に』による)



すべてを知り、すべてを見下ろす作家の特権的地位というものは現代では失われています。文学における真実の問題もおびやかされています。小説家がいくら社会を描くと威張つても、彼の告げるところは、専門家から見れば、常に疑わしいものです。文章と趣向の必要から来る歪曲は、対象の忠実な「再現」とはいいい難い。「彼がこう思った、こう感じた」と書いても、「うそをつけ。実はああも、感じたらう」といわれれば、それに抗弁する手段は小説家にはないのです。こうして小説における真実は、内容的にも技術的にも疑われているので、フランスで「反小説」と呼ばれる流派が現われ、人稱を混乱させたり、ものを固有の名で呼ぶことをやめたりしたのも、こういう苦悶のあらわれだと思われまふ。

しかし視点を覚えて考えれば、こういう技法上の工夫も、小説の普通の作法をひっくり返し、小説の小説性を否定することによつて、かえつて小説の現実性を回復しようという試みと見られないこともありません。

しかし一方小説家が「彼がこう思った」と書けば、必ずそう信じる読者、小説家に欺されるのを喜ぶ読者というものは必ずいるものです。この領域では錯覚を生ぜしめる手腕があるかないかにかつて来ます。結局は作者が読者の前に押し出す人物に読者の注意を惹きつけることが出来るかどうかにかつて来ます。

作者がよい主人公を選んで、彼に読者の喜ぶような行動を取らせ、読者の考えそうなことを考えさせればよい、という伝奇小説の原則は現代でも生きているので、雑誌小説や新聞小説が小説読者という集団を維持しているのは、多くの金儲けのうまい作家が、この原則に忠実だからです。

しかし、小説は十九世紀以来、小説に固有ではない多くの要素を取り入れて肥つて来ました。白痴にかえつたムイシキン公爵の行動は、本で読んでは「幽霊」の幕切れほどの肉体的緊張も伴わないかもしれない。「吾輩は猫である」がいくらくすぐりに充ちてい

ようと、浅草の喜劇一座のように、われわれを苦しいほど笑わすことは出来ません。しかし一方ムイシキン公爵を舞台上に上せても、「白痴」の読後と同じ感動を与えることは出来ません。映画「坊っちゃん」を観た後には、原作の読後のさわやかな快感は残りません。

すべてこれらの物語は全部読まれ、人物は隅々まで知られることを要求しているのです。こういう突き詰めた関心は、われわれの生活に、個人の自由の判断によつて、左右される部分が増えた時代の産物でした。それ以前は権威とか因習に従つてさえいけばよかった（またそうするほかはなかった）のですが、個人の自覚と共に小説も変わりました。要するに市民社会の自由というものと関係がありました。「いかに生きべきか」を考えさせる小説が、いい小説だといういい方を僕は好みませんが（なぜならそのようにして考えられた生き方が、人を幸福にするとは限らないからです）いい小説がことに当つてわれわれの選ぶべき行動について、考えさせるのは事実です。近代の小説の主人公は、外部から強制されたにせよ、自ら進んで求めたにせよ、なにかを行うについては、行う前に考えるということ、存在の意義とするような生活を送るのです。

（大岡昇平『現代小説作法』による）



1 一七九〇年、フランス革命政府議会は、それまでのように人体を尺度にした、地方ごとに違う長さの測り方をやめ、世界中同じ単位で長さを測れるようにしようという決議をした。2 この時代には、グローバリゼーションの震源地はアメリカではなく、フランス革命政府だったのだ。

3 だが同様に普遍指向が強かった古代ギリシャの生んだ哲学者プロタゴラスは、「人間は万物の尺度なり」という、特殊指向こそが普遍的だという、見事な逆説的命題を吐いた。4 実際、人体のさまざまな部分を規準にした尺度は、十八世紀末までは、まさしく普遍的に、誰もそれを怪しむことなく、国ごと、地方ごとに用いられていたのだ。5 フランスで当時用いられていた、長さを測る単位には、アンパン（片手の指をいっばいに広げたときの親指の先から小指の先まで）、

クーデ（肘から伸ばした中指の先まで）、ピエ（足の意。ヤード・ポンド法のフィート「足」に対応）、6 ブース（足の親指の意。一ピエの十二分の一）、トワーズ（身の丈の意。六ピエ）、ブラス（両腕を伸ばして広げた長さ。五ピエ。日本の尋に対応）等があった。7 クーデに対応する日本の尺は、呉服尺、鯨尺、曲尺でも違うが、やはり前腕の骨の長さから来た尺度だ。8 布などを測るのに肘を曲げたかたちは測りやすいのか、西アフリカのモシ社会でも、細長い帯状に織った綿布を売るとき、曲げた肘から中指の先までの長さを単位にして測る（カンティイガ、複数でカンティイセという）。9 日本語で前腕の

小指側の骨を尺骨と呼ぶことから、この測り方と前腕との関連が窺われる。尺骨を指すラテン語の解剖用語は *ulna* だが、これは古代ローマでの長さの単位でもあった（三七センチに対応するから、日本の呉服尺と鯨尺のあいだくらいの長さだ）。0 尺という漢字は手の親指と中指を開いた象形で、日本では咫だ（掌の下端から中指の先までともいわれる）。

一七九一年、フランス革命政府は学者を招集して、地球の北極点から赤道までの経線の距離の一万分の一を、世界に共通する長さの単位とすることを決定した。だが実際にこの距離を測ることはできないので、フランス北岸のダンケルクから、地中海に面したスペイン領バルセロナまでを精密な三角測量で測り、両端の地点の緯度から、北極点・赤道間の距離を算出するという方法がとられた。

この二地点のあいだは山岳地帯が多く、革命直後で政情も不安定であり、測量は困難を極めた。それでも一七九八年に測量を完了し、翌年には白金製のメートル原器が作られた。地方ごとに人間中心で作られていた尺度を、ヒトを離れた「地球」（グロブ）の寸法から割り出すことにしたのだから、これこそ語義通りの「グローバリゼーション」の先駆けといえるべきだろう。

（中略）
アメリカ合衆国は一八七五年の国際メートル条約の原加盟国だが、ヤード・ポンド法は「慣習的単位」として禁止されていないどころか、日常生活ではこちらの方が普通に用いられている。しかもアメリカの影響が強い航空・宇宙関係の国際用語では、メートル法を採用している国も、アメリカの「慣習的単位」に合わせざるをえない状態だ。国際線の旅客機でも、高度や距離の表示に、メートルとフィートが併用されていることは、よく知られている。

現代におけるグローバル化の中心にある米英が、かつてのフランス主導のグローバル化に対して、ローカルな「慣習的単位」に固執している事実を見ても、グローバル対ローカルという関係が、文化外の要素も多分に含む「力関係」の上に成り立っていること、普遍指向と特殊な慣習的価値の尊重という対立も、状況次第、「力関係」の都合次第でいかに変わるものであるかがよく分かる。

（川田順造『もう一つの日本への旅』による）



生成という時、死滅を反対概念として排除するかわかれるが、「おのずから」の中核的意味内容としての生成は、死をつつみこえるものとしての生成である。元和年間（一六一五—二四）に書かれた『見聞愚案記』に、「世話に、自然と呉音に云へば自然天地の様に心得、自然と漢音に云へば、若の様に心得るなり」とあるという。特に中世において顕著であるが、自然はジネンと訓まれる時、今日一般にいう自然・必然の意となり、シゼンと訓まれる時、偶然・万一の意となったことが知られる。このように、「おのずから」も自然も、一見、相反する二義を持っていた。特に「シゼンの事」が万一の最たる死そのものを意味することもあったことが注目される。どうしてこのような相反する二義を「おのずから」・自然がもつことになったかが問題であるが、人間にとって死のような不慮な事態も、あるいは偶然と思われる事態も、高い次元に立つ時、成り行きとして当然のこととして受けとめられるという理解があったからではないかと思われる。高い次元に立つとは、宇宙的地平に立つことではないであろうか。宇宙的地平に立つ時には、人間に万一・偶然として受けとられる事態も、当然の成り行きと受けとられる事態と何ら変わるものではなく、したがって一つの「おのずから」、一つの自然に統括すると理解されたのではないだろうか。

たとえば、世阿弥の脇能『養老』に次のような詞がある。「それ行く川の流れば絶えずして、しかももの水にあらず。流れに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結んで、久しく澄める色とかや。」というまでもなくこれは鴨長明の『方丈記』冒頭の文をうけて、これを云わば逆転させたものである。後半を長明は「淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし」と仏教的な無常観を語っていた。しかし、同じ『方丈記』の「不知。生れ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る」などとともに、ここには日本人のより一般的な実存感覚が示されているのではないで

あろうか。だが、ここで云いたいのは、世阿弥が、その実存感覚をつつみこえ、これを「久しく澄める色とかや」と無窮の流れを謡っていることである。うたかたの浮沈をつつみこえる無窮の流れが語られている。それは人間の死をこえる宇宙の無窮の生成を思うものである。『何方より来たりて、何方へか去る』も、『養老』においては、無窮の生成から成り来たり、生成そのものへ帰することになるであろう。「おのずから」や自然の二義性も、このような事例によれば納得しうであろう。

宇宙を無窮の生成とみるが故に、人間は万一の事態を、また死を「あきらめ」ることができた。「あきらめ」は、日本人の伝統的な死生観の最も根源をなすものであるが、それがこのように「おのずから」としての自然観によつてはじめて可能であったことは注目される。ここに云う「あきらめ」は、今日、日常的な場で云われる消極的なものではなく、それなりに精神的な緊張の高い「あきらめ」である。武士が強調し、その行動性の精神的な心構えとした覚悟も、この「あきらめ」をふまえたものである。

「あきらめ」は、己れの願望、広くはこの世の生の肯定をふくんでい。肯定しつつもなおそれを思い切るのがまさに「あきらめ」である。ところで日本人は、時に現実主義的な人間であると云われる。しかしまた、日本人ほど生に恬淡であり死に親近感をもつものはないと云われる。この相い反するような二つの指摘も「おのずから」の生成という宇宙観をもつてくることによつて統一的に理解される。それは、この世の生は無窮の生成より成り現れたものであり、この世の生に生きること自体が無窮の生成の一瞬に生きることであつたからである。ここから現実肯定的な姿勢が生れた。しかしまた、死は無窮の生成そのものに帰することであり、生の終りを悲しみつつもなお「あきらめ」うるものであつた。

（相良亨「「おのずから」としての自然」（一九八七年）による）



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「若い頃にはよく」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 若いころは現実を見ないから、現実というものがわからない。

B 客観的な私の姿というものはない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「若い頃にはよく」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 個性とは、自分が他人と違うことを自覚している何かである。

B 社会的な役割を自分の個性と考えている人が多い。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「近代合理主義の精神は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 伝統的な数学の方法は、演繹的論理であった。

B 例外を無視し切れなくなったときに、パラダイム・シフトが必要になる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「近代合理主義の精神は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 確率統計的な方法とは、現象のあるがままの姿を記述することである。

B 論理学の全称判断は、われわれの日常生活の意識を形成している。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「時が経過する」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 時間を正しく定義するためには、時間を主題化しなければならない。

B 時間が時の流れであるのに対して、風景は時を持たない空間である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「時が経過する」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 風景を近代の見方で見ると物語になる。

B 原風景とは、空間的な風景から切り離された時間的風景である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「言葉の裏返しを考える上で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 最後の場面で遊んであげれば、この絵本はもっと笑えるものになった。

B 意味の上で反対のことを言えるのは、両者の関係が浅いからである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「言葉の裏返しを考える上で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「ウソ」は「ほんと」よりも、相手との親しさを表す。

B 「ウソ」や「マジ」が鮮度を失うと、「ほんと」が復活する。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「『鉄ちゃん』と言うんですよ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 鉄道マニアは、自分たちが「鉄ちゃん」であることを隠そうとしてはいない。
B 「鉄ちゃん」は、世間では、ある特定の限られた場所に存在する。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「『鉄ちゃん』と言うんですよ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 作者にとって、「すいごう」と「あやめ」は似ているが、「すいごう」と「オホーツク」は似ていない。
B 作者は、新幹線の中に更に細かい分類があることなど考えたことがなかった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「ビジネス・マナー書で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「ご苦労さま」は、仕事を命じた人が、その仕事を遂行した人に言うときに使われる。
B 現代語では、「ご苦労様」と「お疲れさま」の使われ方の差が少なくなっている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「ビジネス・マナー書で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「お疲れさま」は、責任放棄の感触があるため、次第に使われなくなっている。
B 「お疲れさま」は、バブル経済崩壊前には、今日ほど使われていなかった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「いずれにせよ彼は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 彼は、三十七年間もの長い間ひとりで母親の面倒を見ていた。
B 彼らの幸福は、現状を維持するだけでは不十分だった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「いずれにせよ彼は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 変化を嫌う人ほど、現状を肯定できず、不平不満を言う傾向がある。
B 変化に価値を置く人は、しばしば理想のユートピアを目指している。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「『カセット』という」と読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 外国語のカタカナ表記は、カセット効果を持つことがある。
B 翻訳された言葉では、言語のニュアンスが伝わらない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「『カセット』という」と読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A プライマリ・ケアを訳した全科医療という言葉は、言語のもとの意味をよく表している。
B 日本語の漢字は、外国語を近似的に音写することに向いている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 読解マラソン集9番「ハマーショルドの日記は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ハマーショルドは、職務に関わる記述をしないことによって、時間も空間も超越しようとした。
B ハマーショルドにとって、日記とは友人への遺書でもあった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「ハマーショルドの日記は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ハマーショルドは、死を生にとって積極的な意味を持つものと考えていた。
B ハマーショルドの日記は、彼が国連事務総長に就任したときから始まった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「すべてを知り、すべてを見下ろす」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 現代では、小説家が自分の書く小説の登場人物の心の動きを書くことが難しくなっている。
B 小説家の書いたことをそのまま素直に受け取る人が、小説読者の層となっている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「すべてを知り、すべてを見下ろす」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 小説は、小説以外の世界を否定することによって進歩してきた。
B 主人公が行為の前に考えるということが、近代の小説の特徴の一つだ。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「一七九〇年、フランス革命政府議会は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A フランスが世界共通の長さの単位を提案するまで、長さの単位の多くは人体を尺度にしたものだった。
B 普遍的な長さに対する志向は、古代ギリシアに始まった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「一七九〇年、フランス革命政府議会は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 航空・宇宙関係の国際用語では、世界共通のメートル法が使われることが多い。
B 世界のグローバル化を進めるという点で、英米とフランスは共同歩調をとっている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「生成という時」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 自然は、初めは必然の意味であったが、やがて偶然の意味も持つようになった。
B 宇宙的次元から見ると、偶然も必然のように考えられる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「生成という時」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 人間は、人生を偶然的なものだと考えることによってあきらめることができる。
B 日本人には、生を否定して生きる文化がある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×